

やはり俺がおとしものを拾うのはまちがっている。

yoshikei

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妹のたのみで買い物に来た八幡は、そこから落ちてきたイカロスを拾う。そこから始まるハチャメチャな日常劇！

なお、そらおとのキャラクターはエンジエロイドとシナプスの住人以外は出てきません。

日和は出てきますよ〜

初めての二次創作なので、いろいろと手探りな状況です。おかしいところもあるかもしれませんが、どうか温かく見守ってくださいると嬉しいですよ。

0	0	0	0	0	0
6	5	4	3	2	1
16	13	10	7	4	1

目次

「はあ、小町こまちがひとりで行くのは危ないからといって、俺が買いに行くことになるとは・・・」

俺は比企谷ひきがや 八幡総武高校はちまんに通っている。高校2年生のボツチだ。そして今、妹の小町に頼まれアイスを買ってきた帰りで、自転車をこいでいた。

「はあ、どうせこの後もやることは特にないし、ひさしぶりに高台にでも行ってみるか・・・」

俺はため息をつきながら、そう呟いた。

そして、自転車をこぐこと数分後

俺は小さい頃にはよく来ていたが、最近は来ることのなくなった高台の桜の木の下にいた。

そこからは千葉の街を一望することができ昼間は人がいることもあるのだが、もうすぐ夜中の12時になるうとしていることもあり、誰もいなかった。

「ひさしぶりに来たが、やっぱり良いところだな・・・」

そう呟きながら、ふと空を見上げてみると、

黒い穴がぽっかりと空いていた。

「なっ、なんだあれ」

俺は目の錯覚なのかと思い、目を擦りもう一度見てみるが、やはり穴が開いている。

おかしいと思いつつも見続けていると、

「おいおい、嘘だろ、マジかよ・・・」

その穴の中心から、なにかがすごい速度で落ちてきた。ドオオオオオン!!

穴から落ちてきたそれは、俺の目の前の地面に盛大に穴を開け、砂

ぼこりを撒き散らしながらぶつかった。

「げほっ、げほっ」

砂ぼこりが晴れ、月明かりで周りが見えるようになる、目の前の穴を見た。そこには雪ノ下と比べても遜色ないほどの美少女が無傷で横たわっていた。

胸でけえ！

一瞬凝視してしまったがなんとかそこから目をそらすと、次に目に入ってきたのは背中から生えているであろう翼だった。

ドオオオオオン！

ドオオオオオン！

俺の後ろからさらになにかが落ちてくる音がした。
上を見ると、

「やべえー！」

何か、柱のようなものが次々と大量に落ちてきた。
俺はとつさに自転車にまたがると、一刻も早く帰ろうとこぎ出す。
だが、後ろ髪を引かれたようにさっきの穴の中の人が気になった。
くそっ！

俺は自転車の方向をドリフトにより反転させると、穴の手前まで全力でこぐ。

手前まで来ると自転車を飛び降り、穴の中心へと滑り降りる。

「おい！ 大丈夫か！」

俺はそいつの体を持ち上げ、揺すりなんとか起こそうとする。
ふと気になり、空を見上げると、頭上に柱が落ちてきていた。
死ぬのか……。

犬を助けて足を骨折し、人を助けようとしたら死ぬのかよ。

人生はクソゲーだと何度も思ってきたが、最後はこんなことになるのかよ……。

ああ、最後にマツ缶飲んどきたかったな……。

そんなことを考えながら目を閉じ、死ぬのを待った。

だが、一向に死んだ感覚はなかった。それどころか、ふわりとした浮遊感がある。

なんだ？

そう思い、目を開けてみると、空を飛んでいた。

「インプリンティング開始」

声の聞こえたほうを向くと、さっきの美少女が翼を大きくして、俺を抱えた状態で飛んでいた。

そいつがそう言い終わると、翼の生えた美少女の首についた金属のようなものでできた首輪から鎖が伸びてきて、俺の手に巻き付いた。

美少女というか天使？が桜の木の下に俺を抱えたまま降り立つ。そして、俺の前で片膝をついて話し始めた。

「はじめまして。私は愛玩用エンジニアロイド。あなたが楽しむことをなんなりと。マイマスター」

どうやら、俺はとんでもないことに巻き込まれたようだ……。

ふあああ

大きなあくびをしながら、俺は自分の部屋で目を覚ました。

「おはようございます。マスター」

横からそんな声が聞こえて来た。

……ああ、そういえば、昨日の夜空から降ってきたんだっけ？

「マスター、あなたの楽しめることを何なりとご命令ください」

自らをエンジェロイドと呼ぶそれは、顔を近づけながらそう言うてきた。

「ほしいものでも良いんです。私たちエンジェロイドはマスターを楽しませるためだけに作られたものですから」

顔が近く、ボツチの俺にはきつかったため目を背けようと下をみたのだが、それがまずかった。

胸でさえ！

俺は慌てて壁をみた。

「ほしいもの、ねえ……」

俺は意識をそらすために、なにかないかと考える。

「はい」

……俺の、ほしいもの……。

俺は考えを巡らせる。

生活に必要で、どれだけあっても困らないものといえば、金か？

「か、」

「か?」

「か、金とか?」

俺はこんなよくわからないものに手を染めなくなかったが、一番無難そうで何があっても大抵は困らないであろうものを言ってみた。

その間も、顔は壁に向けたままだったりする。

「お金、ですか?」

だって、あんなに大きなものが目の前にあつたら、大変じゃないか！それも、かなり容姿の整ったやつのだぞ！俺なんて、告白して1秒

もたたずにフラれるまでである。

…フラれちゃうのかよ、俺……。

「一千億ほどでよろしいでしょうか？」

そんなことを言ってくる。

一千億？え？それって一千億ジンバブエ・ドルってこと？まあ、それでも、60億円くらいにはなるんだろうが……。

「そつ、そうだな。それだけあったら、一生働かなくても生きていけるな」

俺がそう答えると、そいつはどこからか一枚のカードを取りだした。

「トランスポート」

そいつがカードに向かってそう言うと、そのカードが光だし、別の物へと変化した。

カードは電卓のようなものになり、そいつは電卓のようなものを操作した。

ポチポチポチ……

そいつが電卓の操作をやめると、

ドサドサドサ

「うわっ！」

俺の頭の上から、札束が大量に落ちてきた。

落ちてきた札束の一つを手に取り、見てみると、日本円のようにだった。

(……まさか日本円で一千億ってことなのか?)

「はい。その通りです。マスター」

「マジで!？」

俺は驚きながらも、なんとか話せるように精神を落ち着かせる。

そいつのほうをパツとみると、手に持っていた電卓のようなものはすでになく、変化する前のカードの状態になっていた。

「なっ、なんだ？そのカードみたいなやつは、どういうものなんだ？」

「このカードは、こちらの言葉でいうと転送装置なんです」

「転送、装置、」

「マスターのご要望に応じて、シナプスから必要な機器を取り寄せるんです」

「シナプス？なんだそれ。聞いたことないぞ？」

「シナプスがなにかについては私のなかには情報がありません。私もマスターにであって目覚めたばかりですから」

そいつは、一呼吸おいてからさらに話し出した。

「私は愛玩用エンジェロイド。タイプα、イカロス。マスターを楽しませるためだけに作られた、シナプスの製品です」

シナプス。どう考えても、俺たちの知っている世間ではない場所にあるものだろう。

こんなものが作れて、空まで飛べるとかおかしすぎる。

「まあ、難しいことはいいか。俺たちの知らないことなんてまだまだ世の中に溢れているんだろうからな。それで、他にどんなことができるんだ？」

俺がそう聞くと、そいつ改めイカロスは「なんでも」と答えた。

「なんでも？」

「はい」

そうか。なんでもと来たか……。

俺は考えたが、特にやりたいことが出てくるわけでもない。

……無欲というか、ほんとにやりたいことがないんだよな。やりたくないことならあるけど、もう解決したし。

そんなことを考えながらふと下を見ると、俺はまだ寝巻きを着ていた。

……そういえば、今日も学校だったな。

「えつと、イカロス、でいいのか？」

「はい」

「じゃあ、イカロス」

「なんでしよう、マスター」

「着替えたいから、部屋を出てくれ……」

「わかりました」

イカロスはそう言って、部屋を出た。

出たのだが、俺の手のひらには昨日の夜中から、鎖が巻き付いていた。そのため、

キイイイイ

部屋のドアを閉めようとしても、空いてしまうし、鎖が邪魔で着替えようにも着替えられない。

鎖をはずそうとしてみたのだが、手からは全く外れることはなかった。

「なあ、イカロス」

「はい、マスター。どうしましたか？」

イカロスは俺が呼ぶと、部屋のドアを開けて、返事をした。

「この鎖って、どうにかならないのか？」

「鎖、ですか？」

「そう。この鎖があると、着替えができません」

「鎖なら、このように消すこともできますが」

そうイカロスがいうと、手のひらに巻き付いていた鎖は消えた。不思議に思いつつも、空を飛べるようなロボット？を作れるのなら、これくらいはできるのだろう。と無理矢理思い込み、気にしないことにした。

……たぶん、気にしたら負けなのだ。

「そうなのか。じゃあ、こうしておいてくれ」

「わかりました」

「で、そのドアも閉めてくれると嬉しいんだが」

「わかりました」

イカロスはそういって、部屋の中に入ったのち、ドアを閉める。

「いや、なんで、入ってくるんだ？」

「マスターがドアを閉めろと」

「そうじゃなくて、見られるのが恥ずかしいから、部屋の外に出ていてくれて言ったよな？」

「わかりました」

イカロスはそう言うと、やっと部屋の外に出て、ドアを閉めた。

俺は急いで服を着替えると、部屋を出る。

「イカロス、下に行くけど、その服装はどうにかならないのか？」

「服装、ですか？」

イカロスはおもむろにカードを取りだし、

「トランスポート」

また別の機械を出した。

イカロスはその機械をポチポチと操作すると、

ドサドサドサツ

また、俺の頭上にもものが落ちてきた。

横をみると、女子用の服が落ちていたので、これ呼び出したのだ

ろう。

ただ、ひとつ違う場所があるとしたら、背中の部分に翼用の穴が開いているところだろうか。

「まあ、いいや。早くこれに着替えてくれ」

「わかりました」

イカロスはそう言うと、廊下で脱ぎはじめた。

「ちよっ、ちよっと待て」

どうみても危なそうだったので止めたのだが

「命令の中止はできません」

イカロスはそう返してきた。どうしようかと迷ったが、中止ができないなら、さらに命令を追加してみることにした。

「イカロス、命令だ。俺の部屋の中に入ってから着替えろ」

「わかりました」

イカロスはそう言うと、服を持って俺の部屋に入ってしまった。

数分後

「マスター、着替えが終わりました」

「じゃあ、イカロス、下に行くぞ」

「はい」

部屋から出てきたイカロスをつれて一階へと向かった。

「おはよー」

「おはようございます」

俺とイカロスは、リビングにはいり挨拶をした。

「お兄ちゃんお・は・．．よ・．．」

そこには小町がいたのだが、挨拶の途中で俺の方を向いて固まってしまっていた。

俺も小町につられて、後ろをみる。

すると、イカロスが

浮いていた。

「キヤーーーーー！ お、お兄ちゃんそこから離れて！ なんか変な人がいる！」

小町は大声で叫ぶと、イカロスの方を指差し俺たちの反対側へと逃げた。

「落ち着け小町。こいつは人じゃない」

「へ?」

俺はまず、小町を落ち着かせて、説得することにした。まあ、今さら出ていけと言うのも無粋だし、俺がマスターらしいし、一応は命を助けてもらったからな……。

「まず、人に翼が生えているわけがない」

「あ、ほんとだ」

「次にこの家には、人を浮かせるような仕掛けはない」

「確かに。って、それだと自分で飛んでるってこと!？」

「まあ、たぶんそうだろう。細かくではあるが、ふわふわしてるし、翼も動いてるからな」

「へえ。そうなんだ。なんか、新しいお義姉ちゃん候補の予感♪」

最後の方は小声で言われたため、聞き取れなかったが、どうやら怯えることはなくなったようだ。

「で、お兄ちゃん。どうしてそんなよく分からない人がこの家のなかにいるの?」

小町はリビングにあるテーブルの椅子に座ると、そう聞いてきた。

「まあ、先にこいつを紹介させてくれ」

「わかった」

俺も席につき、話をはじめた。

「こいつはイカロスだ。イカロス、自己紹介をしてくれ」

「わかりました」

イカロスはそう言うと、今朝と同じように自己紹介を始める。

「私はマスターの愛玩用エンジェロイド。タイプαイカロス。シナプスの製品です」

「エンジェロイド？ なにそれ？」

「まあ、ロボットみたいなものだよな？」

「はい、マスター。その認識でおおむね大丈夫です」

「どゆこと？」

小町はこれだけ聞いてもわからないようだった。

まあ、これでわかったら雪ノ下もビックリだとは思いが……。

「ま、細かいことはいいや。めんどくさいし。で、お兄ちゃん。どうしてイカロスさんはここにいて、お兄ちゃんをマスターって読んでるの？」

……まあ、当然の反応か……。

俺は時計をみて、時間にまだ余裕があることを確認すると、夜のこゝとを話し始めた。

「単刀直入に言うと、昨日の夜小町がほしって言ったアイスを買に行った帰りに、それからイカロスが落ちてきてこうなったんだ」

「いや、さっぱりなんだけど？」

「ですよね……」。

俺は予想していた反応とはいえ、少し残念だった。

「なあイカロス、簡単に説明する方法はないか？」

俺はイカロスに小声で相談してみると、

「空中にその当時の映像を投影することはできませんが」

「じゃあ、そうしてくれ」

「わかりました」

とても便利な説明方法があった。

「なに二人でここそこそしてゐるの？」

その代わりに、小町からは変な誤解を生むことになったようだが
……。

「ふーん」

「ということだ。せっかく小町のためにアイスを買って帰ってきたら、もう寝ていたからな、お兄ちゃん悲しかったぞ」

ちよつと皮肉を込めながら言ってみたが、あいにく今の小町にはそんなことは気にならないようだった。

「イカロスさんってどんなことができるの?」

「マスターのご命令であればなんでも」

「なんでもって、あんなことやこんなことも?」

「はい」

「マスターって、お兄ちゃんのことだよな?」

「はい」

イカロスの説明が終わると、小町はイカロスを質問攻めにしていった。

「お兄ちゃん」

「どうした、小町」

「お兄ちゃんはイカロスさんをどうする気なの?」

「うちに居させてやってくれるとありがたいんだが、ダメか?」

「そんなわけではないでしょ? あ、今の小町的にポイント高い♪」

「そうか。俺も小町ならそういつてくれるって信じてたぞ。今の八幡的にポイント高い」

「うわ、キモッ。そうだ、イカロスさん。私のことは小町でいいからね♪」

「はい」

あれれ? 小町ちゃん? その反応はひどくないですか?

小町の反応に少し落ち込んでいると、小町は部屋はどうするのかと聞いてきた。

「うーん」

俺たちはまだ子供で、この家の持ち主ではないため、増設などできない。そうになると、イカロスの部屋というものがないままになっ

てしまう。

俺は少し考えると、ひとつ案を思い付いた。

「なあ、イカロス」

「はい、なんでしよう、マスター」

「俺の部屋のクローゼットを扉にして、新しい部屋とか作れないか？」
「できます」

おお、どこぞの宇宙人と同じようなこともできるのか！

「お兄ちゃんナイスアイデア！」

小町も親指をたてて、賛成してくれた。

「じゃあ、作ってきてくれ」

「わかりました」

そういつて、イカロスがリビングから出ていくと、

「お兄ちゃんはなんで自分の部屋に、イカロスさんの部屋を作ろうと
思ったのかな？」

「は？ それはほら、一番安全だろ？」

「イカロスさん美人だから、かなり危なそうだけど？」

「そんなことはない」

「ふーん」

小町が疑いの目で、俺を見てきていた。

「な、なんだよ」

「べっつにー」

小町がそんなことをいいながら台所へと朝食を用意しに行くと、

「マスター、完成しました」

イカロスがリビングに入ってきて、そう言った。

俺の部屋のクローゼットのなかに新しい部屋が完成したということ
とだろう。ほんとにシナプスとか、どんな技術力持ってたんだよ……。

「そうか。まあ、座れ」

「はい」

俺はそうイカロスに言うのと、小町のいる台所へと向かおうとした。

「あつ、マスター」

すると、イカロスが付いてこようとした。

「いや、イカロスはここで座ってる」

「…はい」

イカロスは渋々で行った感じで、椅子に座り直した。

—————

「いただきます」

「……」

俺と小町は朝食の準備をし終わり、いつもの席について手を合わせていた。

「イカロスさん」

「はい、どうしましたか、小町さん？」

「食べるときには、いただきます、って言うんだよ」

「わかりました」

イカロスは小町にそう言われると、マネをするように手を合わせて「いただきます」

といい、ご飯を食べはじめた。

食べられるんだな、ご飯……。

「お兄ちゃん。小町先にいくよー」

「おう」

ガチャ：ボタン

小町が中学へと先に出掛ける。

「さて、俺も支度して行くか」

俺はそう言つて、自分の部屋に戻り制服へと着替える。

—————

高校へ行く支度が終わり、時間もいつも出ている時間に近くなつてきた。

「行つてきまーす」

俺は家を出て自転車にまたがり、総武高校に向かった。

「で、イカロス」

「はい、なんでしょう。マスター」

俺は自転車をこぎながら、後ろにいるイカロスに声をかけた。

「なんで付いてきてるんだ？」

「マスターの命令をいつでも聞けるようにです」

「帰れ」

「分かりました」

イカロスはそう言つて、家の方向に飛んでいった。

「あ、ヒツキー。やつはろー」

校門の前につくと、由比ヶ浜が挨拶をしてきた。その挨拶つていつでも使えるのかよ……。。

「ああ、由比ヶ浜か」

由比ヶ浜にそう言つて、校門を抜けようとする。

「ねえ、ヒツキー。後ろにいる人つてだれ？　なんか飛んでるんだけ

ど」

由比ヶ浜にそう言われ、慌てて後ろを向くと

「マスター、どうしましたか?」

イカロスが飛んでいた。

俺はイカロスの手首をつかみ、学校を出た近くにある路地裏に入
た。

「おいイカロス!」

「はい」

「俺は家に帰れって言ったよな?」

「一度、帰って再度ここに来ました」

「はあ」

俺は多きなため息をついた。

「家に帰って、俺が帰るまで待機。いいな」

「……………はい」

イカロスはそう言うと、家に飛んで帰っていった。

イカロスの返事の前の変な間が気になったが、すでに見えなくなっ
ているので、気にしないことにした。

放課後になり俺は帰ろうとしたが、由比ヶ浜に捕まってしまった。

ガラガラガラ…………

「よう」

「やつはろー」

俺と由比ヶ浜はそう挨拶をしながら部室のなかにはいった。

「こんにちは由比ヶ浜さん。それと、そちらの方は依頼人かしら?」

「おい、俺も一応部員だぞ」

「あら、そうだったかしら」

雪ノ下はキョトンとしながらそう言った。

俺はいつもの席に座ると、どうしても家にいるイカロスのことが気
になってしまった。

「なあ、雪ノ下」

「どうしたの？ 比企谷君」

「今日は早めに帰りたいんだが」

「あら？ どうしたの？ 比企谷君から珍しくただならぬ用事があり
そんな雰囲気が出ているのだけど？」

「いろいろとあつてな。家がちよつと大変なんだ」

俺がそう答えると、由比ヶ浜はなにか気になったようで、話に乗っ
てきた。

「ヒツキー、何かあつたの？」

「ああ」

「それって、今日の朝、登校してきたときにいた女の人？と関係がある
の？」

「まあ、そんなところだ」

そうだった。由比ヶ浜はイカロスのことを一回だけ見たんだった
……。

「女の人？」

雪ノ下が由比ヶ浜の発言を聞き逃さなかったようで、女の敵を見る
ような目で俺を見てきた。

「あなた、とうとう誘拐を……」

「していないからな？」

ひどい言いがかりをかけたきた。

「まあ、いろいろとあつたんだよ」

「わかったわ。今日はもう終わりにしましょう。ただし、比企谷君の
家に行かせてもらうわ。本当に誘拐していないのか確認する必要が
ありそうなもの」

雪ノ下はそう言って帰る支度をはじめた。